３　桂川・相模川流域シンポジウム
～　桂川・相模川の未来を創ろう　～

（報告者　実行委員長　倉橋　満知子）

⑴　はじめに

○開催日　　2005 年 11 月 5 日

○開催場所　サン・エールさがみはら

桂川･相模川流域協議会が設立の準備期間から始まって 10 年の歳月が流れたが、流域の環境はどう変わったのだろうか。市民、事業者、行政の三者で 100 を超える流域のアジェンダを策定し、アジェンダの実施、行動をする間に、地球規模で迫ってくる環境の危機が、われわれの意思とは関係なく、環境への視点に向いてきたのではないだろうか。

そのような中で、利害関係が相反する三者が合意のもとで環境保全を行動していくという前例のない協議会のなかで、手探りをしながら、「清く豊かに川は流れる」の理念に邁進してきた。

河川法が改正され、コンクリート護岸の排除、住民、市民の意見反映、河畔林の復元と、市民が努力に努力を重ねて言い続けても難しかったことが可能になり、反映されることになったが、果たして桂川・相模川の水質、生き物たちにどれほど良い影響がでているだろうか。流域の生活の負荷が軽減されているのだろうか。流域協議会は、何ができたのだろうか。

これらを検証して桂川・相模川の未来を語り合い、次へと行動し実践することを、「森づくり」、「生き物との共生」、「ごみ問題」、「水質」の分科会で、それぞれ提言をし、確認し合う場となった。

全体会の様子

⑵　開催の趣旨

桂川・相模川流域の市民、事業者、行政が連携して平成 10 年に「桂川・相模川流域協議会」を設立し、流域の環境保全を図るための行動計画「アジェンダ 21 桂川・相模川」を策定、推進してきました。

協議会では、広く流域に関わる皆様とともに情報交換や交流を深めながら、環境保全活動の輪を広げるために『流域シンポジウム』を開催するもので、今日に至るまで、県境を越え、市民・事業者・行政の各関係者が連携して、企画や準備をおこなってきました。

今年は、平成 7 年の設立準備段階から数えて 10 年目にあたるという区切りの年でもあるため、「桂川・相模川の未来」に注目し、今までの活動を振り返るとともに、未来を語るシンポジウムを開催しました。

⑶　当日のプログラム

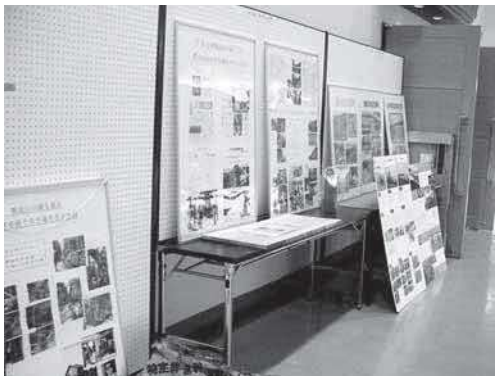
（午前の部）

10：30　主催者開会あいさつ　倉橋満知子（桂川・相模川流域協議会代表幹事）
来賓あいさつ　岩本和紀（相模原市環境保全部長）

10：40　神奈川県・山梨県知事メッセージ

10：50　10 年を振り返って
「桂川・相模川流域協議会の検証」
石田　幸彦（桂川・相模川流域協議会監事）
「相模川の生き物たちの環境から」
勝呂　尚之（神奈川県水産技術センター内水面試験場）
コーディネーター
岸川　敏朗（桂川・相模川流域協議会市民部会員）

12：00 ～ 13：30　《昼　　食》、パネル展示会



パネル展示の様子

（午後の部）

13：30　分科会（次の４つの分科会に分散して実施しました。）

○森づくり　リーダー　石村　黄仁（ＮＰＯ法人緑のダム北相模）
（２階第１研修室）　発 表 者　鈴木　直子（建築設計士）
発 表 者　吉岡　幹敏（吉岡木材）
発 表 者　中田　無双（北都留森林組合）
発 表 者　河野　　東（東林業）

○生き物　リーダー　勝呂　尚之（神奈川県内水面試験場）
（３階第２会議室）　発 表 者　加地　弘一（山梨県水産技術センター）

○水質　リーダー　関　　礼子（立教大学助教授）
（２階第２研修室）　発 表 者　田嶋　龍司（清掃業）
発 表 者　黒木　昭文（造園業）
発 表 者　坂下　　栄（元三重大学医学部教官、元生活クラブ生協検査室長、現環境科学調査オフィス主宰）

○ごみ　リーダー　川嶋　庸子（ＮＰＯ法人アリスセンター）
（３階第１会議室）　発 表 者　渡邊　　茂（東京電力大月支社）
発 表 者　市村　里江（さがみはらごみ連絡会）
発 表 者　長田　尚丸（忍野村観光課）
発 表 者　清水　久子（真木処分場問題を考える会）

各分科会の発表者発表後、フロアー討議

15：30　全体会　　各分科会からの報告、まとめ

16：00　主催者閉会あいさつ
河西　悦子（桂川・相模川流域協議会代表幹事）

⑷　分科会概要

ア　森づくり分科会

（報告者　關　正貴）

森づくり分科会では石村黄仁氏（ＮＰＯ法人緑のダム北相模）がリーダーとなり、「水源林の危機を救う、流域材の活用法とは」というテーマで進められました。

分科会会場には多くの方々の参加があり、流域の森林管理に向けた材の活用

法として建築材としての活用や机・椅子などへの活用が挙げられました。

結果として、この森づくり分科会では、これらを流域材として位置づけ、例えば造林・伐採・製材・加工・建築といったサイクルを、桂川・相模川流域内で、山梨県、神奈川県の行政の枠を超えて各段階の関係者と協力し積極的に推進していくことになりました。

イ　生き物分科会

（報告者　天内康夫）

相模川中流域の水生昆虫、魚貝などが展示された会場では、神奈川県水産技術センター内水面試験場の勝呂尚之さん、山梨県水産技術センター加地弘一さんのアドバイスのもとに、活発な意見交換が行われた。

「川の環境を、地域ごとに選定した指標種（たとえばアユカケ）で評価してみよう」、「湧水、伏流水のマップを作成しよう」などなど。ほかに「生きものが上り下りできない魚道や砂防堰堤等の実態を、ツアー＆ウオッチングで是非見てみよう」、「ナマズなどがコンクリート水路から田んぼに出入りするための特設魚道を設けたい」、「流域各地のアユを食べ比べてみよう」といったユニークな提案も出て、時間がまだまだ足りない分科会であった。

生き物分科会の様子

ウ　水質分科会

（報告者　田嶋龍司）

まず私が、相模原市内からマンション清掃に使用された洗剤が月にドラム缶にして約650缶、建物全体からは約8000缶排出され、このうち約2100缶が直接河川に流入していると、業務用洗剤の実態を示し、また、相模原市の施設において子どもの誤飲事件も起きており、利用弱者保護の視点から清掃委託をという提案をしました。

坂下氏からは、合成界面活性剤の内臓および胎児への影響、精子への影響、水生生物への毒性が明らかにされ、これに対し、石鹸は自然界の循環に組み込まれているとの解説がなされました。

黒木氏からは、緑地管理にプロの植木屋は有機リン系の強力な薬剤を使用しているが、害虫に耐性ができて悪循環となり、雨が降れば河川に流入するが、

農薬を使用しない緑地管理も可能との話がありました。

最後に、これらを現状認識で終わらせず、今後改善に取り組んでいくとの方向性が確認されました。

エ　ごみ分科会

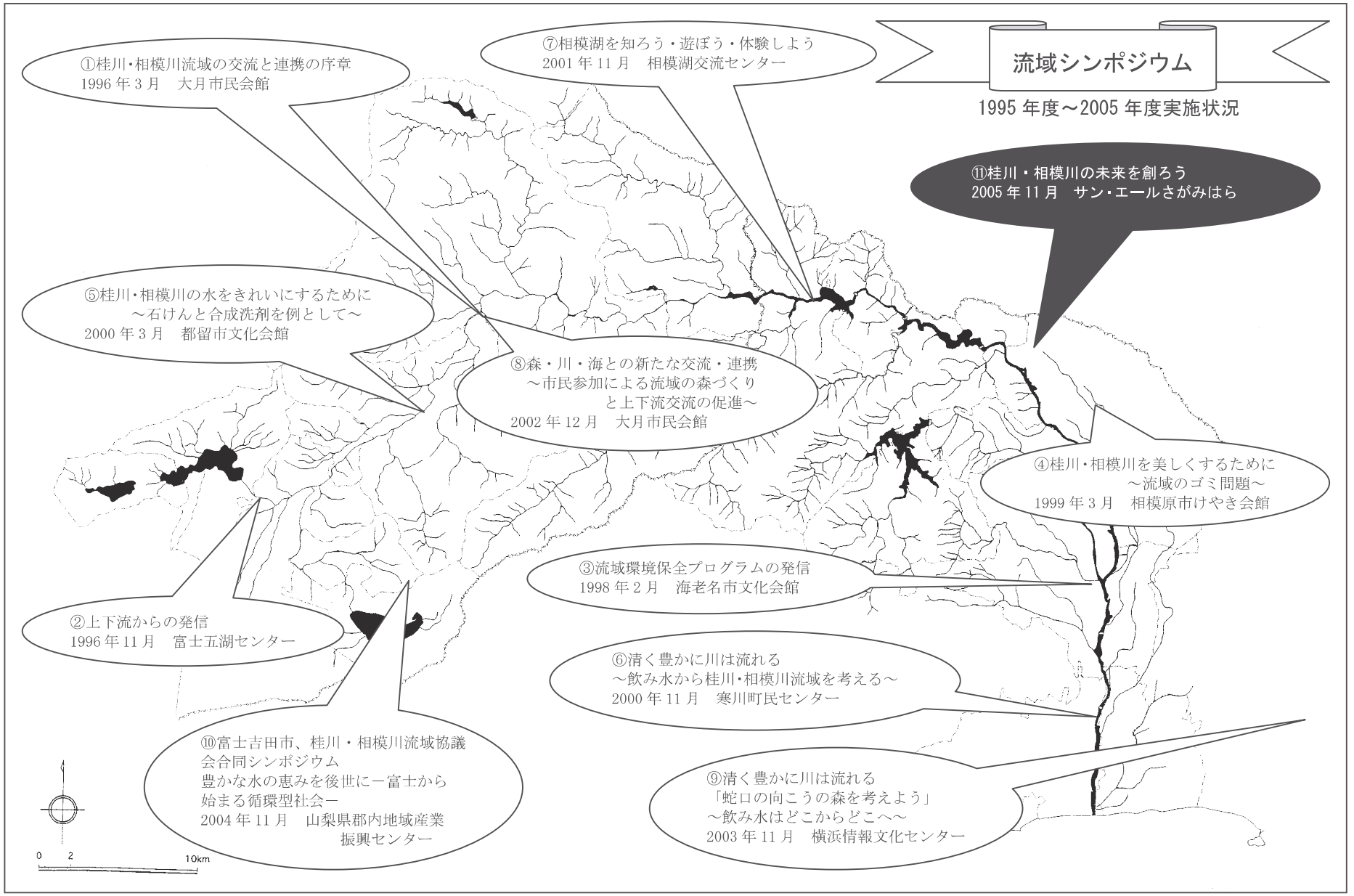
（報告者　市村里江）

ごみ分科会の発表は、次の４名でした。まず忍野村観光課職員から、きれいな上流の水環境を維持していく町の現状と取組み、事業者である東京電力山梨支店大月支社からは、流域やダムのごみは年々減っているのに、取り払う費用は逆に増えているとのこと。ここでも環境悪化が蓄積されている思いでした。山梨県の「真木処分場を考える会」の、処分場建設を阻止した活動の報告。そして神奈川県の「ごみ問題を考える市民連絡会」を代表して、私が産廃工場の再稼動を止めた経過や、相模原市の日本一のガス化溶融炉建設という清掃工場建替の話をしました。

４者ともそれぞれ違った立場からの話でしたが、それぞれの視点からの質問や意見が会場全体で活発に交わされました。

山や川や流域周辺のみならず、あらゆるごみの問題は、ごみを出す私たち一人一人の問題でもあります。行政、事業者、市民がそれぞれ真剣にごみを出さない社会を考えていかねばなりません。今を生きる私たちは、子や孫たちへ良い社会を、良い地球を伝える義務があります。このような集まりを通してより多くの人達とその思いを共有し、伝えていくのが大切な事と、この日改めて実感しました。

参加者の人たち


流域シンポジウム
1995 年度～2005 年度実施状況
①桂川・相模川流域の交流と連携の序章
1996 年 3 月　大月市民会館
⑦相模湖を知ろう・遊ぼう・体験しよう
2001 年 11 月　相模湖交流センター
⑪桂川・相模川の未来を創ろう
2005 年 11 月　サン・エールさがみはら
⑤桂川・相模川の水をきれいにするために
～石けんと合成洗剤を例として～
2000 年 3 月　都留市文化会館
⑧森・川・海との新たな交流・連携
～市民参加による流域の森づくり
と上下流交流の促進～
2002 年 12 月　大月市民会館
④桂川・相模川を美しくするために
～流域のゴミ問題～
1999 年 3 月　相模原市けやき会館
③流域環境保全プログラムの発信
1998 年 2 月　海老名市文化会館
②上下流からの発信
1996 年 11 月　富士五湖センター
⑥清く豊かに川は流れる
～飲み水から桂川・相模川流域を考える～
2000 年 11 月　寒川町民センター
⑩富士吉田市、桂川・相模川流域協議
会合同シンポジウム
豊かな水の恵みを後世に－富士から
始まる循環型社会－
2004 年 11 月　山梨県郡内地域産業
振興センター
⑨清く豊かに川は流れる
「蛇口の向こうの森を考えよう」
～飲み水はどこからどこへ～
2003 年 11 月　横浜情報文化センター
0
2
10km